

シジミチョウを蟻の巣の中で見出したこと

昨年(1935年)6月15日、上高地より徳本峠を越えて島々への下りである。

峠を出発したのが既に午後3時半頃であったので、日暮までに下へ降りるためには、私達はかなり急がねばならなかった。しかし私は、時間に追われながらも、蟻の巣を見つけるために時々立止り路傍の石をひっくり返し、狼狽する小さな昆虫どもを、ピンセットも使わずに管瓶に収めていた。幾つかのこうした石の下には、クシケアリ属 (*Myrmica ruginodis silvestrii* WHEELER) や、ケアリ属 (*Lasius niger* L., *L. flavus myops* FOREL), あるいはヤマアリ属 (*Formica sanguinea fusciceps* EMERY, *F. fusca* L.?) などの蟻類がそれぞれの生活を営んでいたのである。

鯉留より少し下(1,149m)に到って、私はさらに1個の石を起こし、トビイロケアリ (*Lasius niger* L.) の巣を見出した。石は径20cmばかりのあまり大きくないもので、石下のトビイロケアリの colony として特別に変ったことは見られなかった。しかし何気なく眼を今裏返したばかりの石の上に転じた時、その時までに見つけた多くの colony には一度も見られなかった1種の昆虫が幾つか付着しているのが私の注意を引いたのである。

それは小さな鱗翅類の幼虫および蛹であった。蛹の中のあるものは、蛹化したばかりと思われるような緑色を呈し、あるものは既に黒紫色を呈して羽化の近いのが推察された。そして幼虫はすべて老熟しており、ほとんど身動きもしなかった。これらは何れも腹面を石の表面に当て、石をもとのとおりに直せば、ちょうど蟻の巣の内部において、あお向けに巣の天井に付着している状態にあったのである。

巣をあばかれた蟻は、一部は巣の周囲に散乱し、一部は土中の孔道に姿を消した。しかしなお数匹は、この混乱のさ中にあっても共棲者幼虫の傍を離れず、その体背面より出る甘液を吸うに忙しいかのように見受けられた。

私はこの付近においてさらに数個の石を起こした。その結果、最初の石に隣る石下のトビイロケアリの巣に、今一度5, 6匹の鱗翅類幼虫および蛹が、前

と同様の状態に付着しているのを見出したが、他の colony の巣ではもはや再び見ることができなかった。

これら共棲者の蛹および幼虫数匹を、私は綿を詰めた管瓶に収め、翌日京都に持ち帰った。

京都において、これらはシャーレ中に放置されたが、間もなく幼虫は蛹となり蛹は成虫となって1匹も途中で死んだものはなかった。

羽化した当座の成虫は自由にそこら辺りを歩きまわる。そして翅が軟く、自由に曲がるこの当座においては、実験的に与えられた狭い隙間も不自由なく通りぬけることができた。

蟻の巣の内部で羽化する成虫も、おそらくこのようにして巣口から外に這い出るのではあるまいか。

私は成虫によって、この鱗翅類が、シジミチョウ (*Lycaena argus* LINNAEUS) であることを知った。

蟻と共棲する鱗翅類については、外国では LYCAENIDAE 中多数の属について知られ、この中、*Lycaena argus* も *Formica* 属の蟻と共棲することが古くより知られている。しかし本邦においては、台湾における *Crematogaster* 属の蟻と *Aphaneus* 属の蝶の幼虫との共棲が、高橋良一氏 (動物学雑誌 第41巻, ZEPHYRUS 第1巻) によって報告されている外、私の知る範囲では、何れの蝶についても何ら報告を見ないようである。たまたま、私は上記したように、内地においても、シジミチョウがトビイロケアリと共棲することを見出したので、これをひとまずここに記して諸賢の御参考に供する次第である。なお本邦でも、*Lasius* 属以外の蟻類、例えば *Formica* 属や *Myrmica* 属についても、将来において、シジミチョウ類との関係が見出さるるに到りはしないかと考える。この点、寺西暢氏 (関西昆虫学雑誌 第2巻, 第2号) がキマダラルリツバメに関して推定されたことも、実現の可能性に富んでいるように思われるのである。

最後に、蟻の種名に関して種々御教示を下された寺西暢氏に厚く御礼を申上げる。